

食と農おおいた

No.146 JUL 2026

CONTENTS

01 理事長就任のご挨拶
NPO 法人おおいた有機農業研究会　理事長　赤嶺 祐司

02 「循環型の食文化創造企業」を目指して
株式会社後藤製菓　代表取締役　後藤 亮馬 氏

03 土づくりからはじまるオーガニック給食
NPO 法人おおいた有機農業研究会　事務局長　佐藤 一彦

04 活動報告
2026 年度通常総会

05 イベント案内
有機 JAS 講習会他

SAMPLE

NPO 法人 おおいた有機農業研究会

◆ PRESIDENT'S MESSAGE ― 理事長メッセージ

理事長就任のご挨拶

理事長　赤嶺　祐司（あかみね　ゆうじ）



会員の皆様、そして日頃より当研究会の活動を温かく支えてくださっている関係各所の皆様、このたび歴史ある当研究会の理事長に就任いたしました赤嶺祐司でございます。大役に身の引き締まる思いではございますが、大分県の有機農業のさらなる発展と、次世代への確かな継承を目指し、微力ながら全力を尽くす所存でございます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

01　研究会との出会い

私と当研究会との出会いは、今から 14 年前の 2012 年に遡ります。当時、私は株式会社フォレストホールディングスに在籍し、有機野菜専門の栽培会社である「株式会社 ohana 本舗」を立ち上げることとなりました。

企業による有機農業への新規参入という、当時はまだ前例の少ない暗中模索のスタートであり、技術的にも経営的にも、数多くの壁にぶつかる日々でした。その立ち上げという最も苦しい時期に、親身になって手を差し伸べ、多大なるご支援と道標を与えてくださったのが当研究会でした。先人たちが築き上げてきた有機農業の知見や、温かいネットワークがなければ、会社設立は到底不可能なことでした。この時にいただいた多大なる恩義が、私の有機農業に対する情熱の原点であり、今回理事長をお引き受けした最大の動機でもあります。

02　有機農業経営、３つの厳しい現実

実際に会社を経営し、有機農業の現場に深く身を置く中で、私はある「厳しい現実」に直面することになりました。有機農業をビジネスとして、あるいは持続可能な生業として軌道に乗せるためには、次の 3 つの要素を高いレベルで、しかも「同時並行」的に実現しなければならないということです。

SAMPLE

①	②	③
栽培技術の確立	**販路の開拓**	**記録管理**
気候や土壌に適応した、確かな栽培技術。	生産した農産物を安定した価格で届ける。	有機 JAS 継続のため認証を維持し、消費者の信頼を担保する。

これらはどれか一つが欠けても成り立ちません。しかし、この 3 つの項目を、個々の農家が日々の激しい農作業の中で、個々人の努力だけで実現しようとしているのが、当時のそして今も続く現状でした。一人ひとりの努力には限界があります。このままでは、意欲ある生産者が疲弊してしまうのではないかという強い危機感を抱きました。

この課題を解決するためには、個の力を結集する仕組みが必要であると考え、私は行政からのご支援もいただきながら、課題解決への挑戦として「共同出荷組織」の立ち上げに奔走いたしました。生産・流通・事務管理の負担を分かち合い、強みを活かし合う体制をつくること。それが持続可能な有機農業への近道であると信じたからです。

この挑戦の最中、私は当研究会の理事にも就任させていただく機会を得ました。現場で直面するリアルな課題を他の理事や会員の皆様と共有し、どうすれば大分県の有機農業がより良く、より強くなるのか、ともに悩み、努力を重ねてきた時間は、私にとってかけがえのない財産となっております。

03 定年退職、そして再びの要請

2023 年、私は定年退職の節目を迎えました。有機農業の未来を若い世代へ繋ぐためにも、後進に道を託すべきだと考え、全ての役職から退き、一人の引退者として地域の自治活動と 1 ヘクタールの稲作栽培の日々を送っていました。

今年の年明けのことです。当時の理事長と事務局長から、次期理事長への就任要請をいただくこととなりました。それも一度ならず、複数回にわたり熱心に足を運んでいただき、大分の有機農業の未来に対する熱い思いをぶつけられました。

正直に申し上げれば、一度は退いた身であり、持病の不安もありました。しかし、目を閉じれば浮かんでくるのは、14 年前に私たちが困り果てていた時に温かく迎えてくれた当研究会の諸先輩方の姿、実直に土と向き合う会員の皆様の顔でした。「今の自分があるのは、あの時この研究会に救われたからだ。今こそ、その恩を返す時ではないか」。そう心に決め、大分県の有機農業の発展に再び我が身を捧げる覚悟で、このたびの要請を承諾させていただきました。

SAMPLE

04 大きな転換期のなかで

現在、私たちの取り巻く環境は、大きな転換期を迎えています。

2019 年から始まったコロナ禍を経て、人々の健康志向や安心・安全な食への関心はかつてないほどに高まりました。さらに、2021 年に国が策定した「みどりの食料システム戦略」では、2050 年までに有機農業の取組面積を耕地面積の 25%に拡大するという意欲的な目標が掲げられました。

文字通り、有機農業には今、強力な「追い風」が吹いているはずです。しかし、政策や世論の華やかな動きとは裏腹に、私たち生産者や現場の事業者の「実感」として、その恩恵や変化を肌で感じられているでしょうか。残念ながら、現場の底上げや経営の安定、所得の向上といった実感を伴うレベルには、まだ至っていないのが冷徹な現実ではないでしょうか。

この「政策の追い風」と「現場の実感」の間にあるギャップを埋めることこそが、今、当研究会に課せられた最大の使命であると考えています。単なる理想論ではなく、どうすれば生産者が適正な利益を得て、持続可能な経営を行えるのか。この課題解決を公平な立場でコツコツと進めて行かなければなりません。

05 小さな組織だからこその強み

ここで、現在の当研究会が置かれている状況についても、率直に触れなければなりません。社会的な関心が高まる一方で、現在の私たちの研究会は、組織の規模や人員数の面において、決して恵まれた体制にあるとは言えません。他県の大規模な組織のように、潤沢な予算や人員を投じて、世間の目を引くような華々しい一大イベントや大々的なプロモーション活動を展開できるような状況にはないのが実情です。

しかし、私はそれを決して悲観すべきことだとは思いません。むしろ、私たちがやるべきことは、見栄えの良い華やかさを追うことではなく、どこまでも地域に根ざし、地に足をつけた活動を愚直に積み重ねていくことだと確信しています。

農業とは本来、一朝一夕に成果が出るものではありません。毎日の丁寧な土づくり、日々の天候との対話、そして一株一株への目配り。その「地道な作業の積み重ね」こそが、美味しい作物と確かな信頼を育てます。私たちの研究会活動もまた、全く同じです。

一人ひとりの会員の声に耳を傾け、地域の課題を一つずつ紐解き、解決の糸口を求めていく。人数が限られているからこそ、私たちはより深く繋がり、より強固な信頼関係を築くことができます。派手な跳躍はできなくとも、一歩ずつ、コツコツと確実に歩みを進めること。これこそが、激動の時代にあっても決して揺らぐことのない、当研究会の本質的な「強さ」になると信じています。

SAMPLE

06 公平な組織として

当研究会は、特定の誰かの利益のためではなく、大分県の有機農業に関わる全ての人々、あるいはそれを支える消費者のために存在する「公平な組織」でなければなりません。この公平な立場を断固として守りながら、現在の限られたリソースの中で最大限の成果を生み出すため、私は微力ながら有機農業の底辺拡大への課題解決をコツコツと遂行していきたいと考えています。

これまで有機農業は、個人の高い志と、並々ならぬ努力によって支えられてきました。しかし、これからの時代は、その志を地域全体の財産として仕組み化し、組織として支えていくステージへとシフトする必要があります。新規参画者が、先輩方の知見をスムーズに受け継ぎ、安心して農業に専念できる環境づくりを、地道に急がねばならないと思っています。

07 結びに

当研究会を支えてこられた会員の皆様、行政の皆様、消費者の皆様、流通関係者の皆様、関係するすべての方々と固く手を携え、対話を重ねながら、一歩一歩前へ進めてまいりたいと考えております。

皆様の知恵と情熱を結集し、この大分の地に、より豊かで持続可能な有機農業の未来を、そして当研究会のさらなる発展をともに築いていきましょう。

皆様からの変わらぬご指導、ご鞭撻、そしてご協力を心よりお願い申し上げまして、私の就任の挨拶とさせていただきます。

📌 私たちが大切にすること

⚖ 公平な組織	特定の誰かの利益のためではなく、大分の有機農業に関わるすべての人のために。
対話を大切にする	一人ひとりの声に耳を傾け、共に考え、共に歩みます。
地域に根差した活動	地域の課題に向き合い、地に足をつけた活動を積み重ねます。
次世代へつなぐ	新規参入者が安心して学び、挑戦し、未来へつながる環境を育みます。

SAMPLE